

こだま

13号

日本基督教団 若松教会

〒808-0053

北九州市若松区修多羅1-8-1

TEL:093-771-4329

絆を豊かに一共におられる神

茶屋明郎牧師

『「見よ、おとめが身ごもって男の子を生む。
その名はインマヌエルと呼ばれる。」
この名は「神は我々と共におられる」という意味である。』

(マタイによる福音書1章23節)

さまざまな人間関係の場において、強く、豊かな絆で結ばれている姿を見る時、例えば、ダビデとヨナタンのように、お互いを自分を愛するように愛している関係のように、心を通い合わせ、相手を認め合い、信じあい、尊敬しあっている、兄弟や友人知人などの豊かな人間関係を見た時、私たちは感動し、称賛し、大きな喜びを感じ、憧れを抱く。

クリスマスのメッセージは、神が私たち人間と共におられることを現し、強く豊かな絆を結び、私たち人間が大きく、強く、豊かに生きてほしいし、その生きる力と命を注ごうと考え、実際に豊かに注いでいる、大きな喜びである出来事を述べ伝えている。

この大きな喜びである救い主の誕生が、昔から、ずっと前に預言されていることを伝えているのは、この出来事は、大いなる、創造主なる、歴史を支配している、生ける神の業であり、神が動き、働き、導き、豊かな絆が結ばれるように願い、実現する、この世で最も確かな、真実な、確実な出来事であり、必ず実現するというメッセージが込められる。

神が我々と共におられるということ、最初に身をもって体験しているのは、ヨセフとマリアであり、特別な人間ではなく、普通の人間である二人において実現していることや、聖書に初めて出てきている、兄弟殺人、つまりアベルを殺害したカインにも神が共におられ、赦されて守られていくという約束の出来事にも見られるように、クリスマスメッセージは、す

べての人にも開かれ、確実に実現することを証している。

神は、なぜ私たち人間と強く、豊かな絆を結ぼうとされたのか。それは、絆が破綻して、孤独を感じて生きている人が数多くいるからです。すなわち、他者愛よりも、自己愛が強い人間が造り出す絆は、破綻しやすく、争いや対立のなかで、悩み苦しんだり、また病気やさまざまな挫折の危機に直面して、独りぼっちな辛さを感じている人が数多くいるからであり、そのような人々が、神との絆、いつも変わらず、どんな人においても結ばれている神との絆、人間の絆による喜びよりも、はるかに勝る喜びをもたらす、大きく、強く、豊かな愛と恵みの神との絆によって、孤独を感じないで、寂しさや悲しみそして苦しみから解放されて、生きる力と命を得て、慰めと癒しと平安、そして喜びと希望を抱いて生きる。このような生き方をしてほしいという、聖なる願いのためであり、私たち人間は孤独ではなく、愛され、喜びを生きるために生まれてきていることを経験してほしいためです。



強く、豊かな絆を築くためには、お互いの努力が必要になります。棚ぼた式に与えられるものではなく、それぞれがいろいろと相手を気遣うことによって生まれてくるものであり、他者への愛と赦しと尊敬が必要になり、自らが、まず積極的になり、自分の方から心を開き、寄り添い、絆を結ぼうという熱き思いや働きかけが必要になります。

このような人を、つまりパウロも語っているように、敵意を取り除いて、和解の働き手となり様々な違いを乗り越えて、共に生きて行く人間を造り上げるために、神はご自分が共におられることだと考えられた。なぜなら、主イエスも仰っているように、ご自分のところにこそ、共に生きて行く力と命が泉のごとく、湧き出ずるごとく、尽きることのない、渴くことのない、愛と赦しなる永遠なる命が生まれるからです。

このことを証しするためにお生まれになったのが、救い主イエスであり、その生涯を通

して、差別や偏見などのさまざまな苦難の中で、孤独を感じている人たちに、ご自分の方から寄り添い、共に生き、「あなたにも神が共にいる。一人ではない」と言葉をかけられ、傷ついている心を慰め、不安や恐れ的心を癒し、心が折れ、絶望している心を立ち上がらせ、希望に生きることが出来、自分ことだけではなく、他者のためにも生きる人間に造り変えられています。

生ける神は、このような生涯に生き、命がけで「神が共にいること」を伝えて、十字架につけられて死んだイエスを復活させられて、イエスの生涯は、神の御心に適い、ご自分が遣わした救い主であることを証しされています。

だからこそ、救い主イエスの誕生は、神が共におられることが真理であり、確かなことであることが示されて、豊かな絆をもたらすことになっている。だから、クリスマスは大きな喜びである。

戦争と暴力と

松本京子

2022年2月24日、ロシアが突然ウクライナを侵略したことを知った時は衝撃でした。すぐ終わると思われたこの戦争はまだ進行中です。NATOが(北大西洋条約機構・欧米40カ国が加盟)ウクライナを軍事的に応援し、NATOパートナー国(9カ国)の日本政府も支援しています。ロシア軍は、世界を相手に戦争をしているようなものです。

あらゆるメディアが、戦争を刻一刻と発信しています。避難する人々の波、列車を待つ人々が押し寄せている駅、負傷した市民がいっぱいの病院、爆撃された保育園や学校、破壊されたままの建物、散乱する黒焦げの死体、人影のない町や大通りなど、映像に見られるのは暴虐の限りです。リアルタイムでグローバルに流布しているので世界中の人がこの暴力を体験共有しています。

世界の巨大メディアに加えて市民によるスマートフォンからの発信もあり情報量は多く、見ることによる苦しみも増します。ロケット弾による無差別攻撃、ドローンによる空爆と新しい型の破壊力に圧倒されました。日々革

新される技術が人間の幸福のためではなく、破壊や暴力に利用されているのを目の当たりにしています。

英国諜報員で作家のグレアム・グリーンは「死の支配する地域に一介の非戦闘員旅行者として自分がいる場合、私はいつも一種の罪の意識をもつ。援助の目的なしに災害の場所を訪れることは誰もしないはずなのだ」(『コンゴ・ベトナム日記』1954年)と、書きました。ウクライナ戦争を“目撃”した私たちは援助の目的なしで死の支配する地域にいるのではないかと考えさせられています。ロシアが一方向的にウクライナに侵入した。この戦争の暴虐の一切の責任はプーチン大統領にある、と思いたいです。が、ウクライナ戦争の暴力を見た私たちにも何ほどか責任があると告げられています。見ること、知ることは責任を伴いますから。

待降節、祈り合わせて、この世の闇を光に導く主をお迎えいたします。ウクライナ人、ロシア人、そして世界中の悲しんでいる人々が慰められますように。

コロナの千日

佐藤陽子

ケーキのCMのクリスマスキャロルに教会の礼拝がなつかしく思い出され、思わず鼻の奥がキュンとなり胸があつくなくなってきました。コロナ禍での三回目のクリスマス、今年もまた教会の兄弟姉妹とご一緒にお祝いすることはまだ許されていません。

外出禁止、面会禁止が続く施設での三年間体の衰えは著しく、週一回のリハビリが週二回になりました。少し散歩でもさせてくれたら気分も晴やかになるのにと窓からほんのちよっと見える洞海湾を眺めながら恨めしく思ったりしています。

制限された生活の中では四季の移ろいさえわからなくなってしまいました。食欲をなくし鬱っぽくなっていた頃、教会の皆様が手を差し伸べて下さいました。生活に欠かせない日用品、心づくしの美味しい食べ物、季節ごとの野菜や果物に何度涙したことでしょう。

食いしん坊の私にとって毎週届けて下さる二階堂光子姉の心配りの行き届いた大好物の玉子焼き、美味しい漬物や野菜にありがたくて嬉しくて、おなかも心も癒され救われた思いがしました。また、私の誕生日を覚え

て下さり、いろいろな方から贈り物を頂きまして大感激しました。決して一人ではない、教会の皆様といつもつながっている心強さをあつく感じました。

最近はまだコロナ感染者が増加しています。何度も襲ってくる波にも冷静な心もちでいられます。やはりいつも守られている安心感があるからでしょう。コヘルトのことばに「何事にも時があり 天の下の出来事にはすべて定められた時がある」。まだまだ越えなければいけないハードルはあると思いますが定められた時を焦らず怠らず皆に支えられ生かされている日々。すべてのことに感謝しつつ希望をもって待つことにしようと思っています。



私の父親

和田栄里子

私の父は昭和二年一月一日生まれの95歳になります。

30代の頃から、テニスに没頭し、負けず嫌いで、仕事が終わるとテニスで体を動かし、一年中試合で、九州を飛び回っていました。テニスをやめたのは84歳の春でした。

それからは社交ダンス、ゲートボール、パソコンと何でもする社会的で活動的な父でした。

その頃から、二人で近くを散歩したり二人で話したり、よく母の思い出話をしては笑っていました。

そんな父が歩けなくなり苦痛にたえている父を見ていると、同じくらい胸が痛みます。

ほんとにここまで大きくしてもらい、見守ってくれた父には感謝でいっぱいです。

父からは支えてもらっていたのが今はほんとは分かります。

私も兄弟4人支え合いながら、一日一日を大切に生きていこうと思います。



中央後方の背の高い方が市丸正和さんです。

いわゆる「日記」は、中学一年のクリスマスに姉からもらったノートに書いたのが始まりだった。

それまでは、小学校低学年の頃、父から日記を書きなさいと言われて書いていたことがあった。一ヵ月して父に見せると中味をチェックされて、おこづかいをもらえた。どんなことを書いていたかは覚えていないが、おこづかいにつられて書いていたことは覚えている。それ以外は、小学校の宿題で書いていたかもしれない。

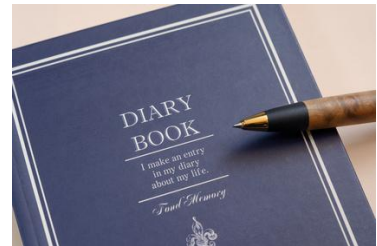
中学一年から自発的に書き始めた日記は、初めの頃「アンネの日記」のアンネのように、日記に名前をつけて話しかけるように書いていた。名前は忘れてしまったが、ミッションの女学院中学、高校と温室のような日々に育まれながらも、その年なりの悩みや苦しみ、夢や希望、喜びなどの心の声をつづり、私の宝物となった。生きていく上で呼吸をするのがあたり前のように、日記をつけることも毎日の決まりきったことだった。

大学に入って一人住まいをする時、結婚し

た時、数回の引越しの時、いつも全部持って動いた。三十数年一日も欠かさず書き続け、大切にしていたかけがいのない日記帳だったが、ある日突然日記とは残すものではないと思立ち、すべて処分した。

一介の市井の民である私の日記は、良くも悪くも……「良く」ならいいわけで、「悪く」だけが正しいのかもしれない……現在の私を形成してきた心の軌跡であるから、残さなくても同じことだとわかったのである。というより残したくないというのが本音かもしれない。

全く書かなくなって長い時がすぎたが、いつか父に会った時、おこづかいをあげると言われたら、又日記を書き始めるのもありかなと思う。



ワークキャンプ

二階堂裕

北九州地区教会学校部では、今年も集まっての行事が出来ない事になりました。

そこで、昨年同様皆に一言書いて貰って「みんな一書」と言う文集を作ることになりました。60年前の話で中々思い出せない事もあります私達団塊の世代が育った頃は教会の青年達も数多くおられて集会や行事も多く実施していました。

地区教会学校部に出すものと一緒ですが13号の原稿とします。

宮城県仙台市で育った私は「仙台五橋教会」の教会学校に通っていました。

「こだま11号」にも書きましたが、高校生になると「共信会」と言うグループになり、夏休みは青年会グループの「共励会」と一緒に約1週間のワークキャンプに参加しました。

宮城県南部にある開拓集落である三住地

区(今は白石市三住)の小学校をお借りして農家のお手伝いをしました。

20人位の人数でした、当時は車を持っている人はいなかったのでバスで最寄りのバス停まで行きそこから大鍋や調理道具、食料(米や野菜、調味料)、私物等を持って結構な距離を歩いて行きました。

朝起きて、朝食→朝の祈祷会→作業→昼食→レクリエーション→作業→夕食→夕礼拝→就寝までの繰り返しだったと覚えています。

食事は自炊で班分けの当番制でしたので当番が回ってくると早朝から米を炊いたりおかずを作ったりとバタバタした事を思い出します。昼食(おにぎり+漬物)も一緒に用意しなければならなかったので作業は大変でした。

夕食はカレー、芋煮、焼魚、玉子焼き等を楽しく作りました。何回かは焚火でBBQも楽しみました。

地元の農家の方から搾ったばかりの牛乳の差し入れがあり、濃くて美味しい牛乳を頂きました。

午前中の作業はコンニャク畑の雑草取りが主な仕事でしたが、はいつくばっての結構ハードな作業でした。コンニャクは芋の部分を加工して食べるというのをここで初めて知りました。

又、植え付けてから収穫まで3、4年かかる事もここで学びました。

昼食後のレクリエーションはこの集落及び近郊の集落の子ども達を集めて聖書のお話をし、劇や紙芝居、時には外でソフトボール、サッカーをしました。結構な人数が集まってくれました。

兄や従兄(兄と同年)も参加しており班のリーダーをしていました。私は、高校の3年間毎年このワークキャンプに参加する事が出来ました。

何年か前仙台に帰省した折、兄の運転する車で近くを通りましたので小学校(白石市立深谷小学校三住分校)を見てきました。学校近くの風景がすっかり変わっていましたが兄と昔の話をしながら懐かしんで眺めてきました。



haiko-riderのブログより

句会(2)

野末育利

俳句ブームの立て役者、夏井いつきさんをNHKは「プロフェッショナル」で取り上げた。彼女は「若い人にコミュニケーションに必要な言葉を教えたい」と志して、教師から俳人へと変身されたことを知った。歳をとったら言葉の勉強したらいけないのかいと、言いがかりを付けたくなるが、始めてみると、いかに言葉を知らないかが分かり始め、やっぱり老人には手遅れ感がある。またまた駄作を語って笑っていただこうと思う。

夏の雲カッターボートの櫂を立つ

中学三年(67年前)の夏休みの思い出を句にした。私の居た山口県光市の中学校は、三年生になると夏休みに二泊三日の海洋訓練があった。山口県周防大島の大島町から沖の大磯燈台を40人乗りのカッターボートで往復する。国立大島商船高校(現・高専)の指導監督もとて安全、規律、仲間への思いやり、目標達成などがテーマだ。一本の櫂も中学生には重く、二人で操る。出発と到着には「櫂を立て!」の号令で皆が一斉に櫂を立てる。夏の雲のもと、赤銅色した仲間の顔が目浮かぶ。

戸当たりを直す期限の冬隣り

今度は初冬の句。我が家は築90年の木造で、指物大工さんが居てくれるお陰で木造の良さが発揮される。ところが最近、大工さんが居なくなりつつある。暖房が要るような寒い日もある初冬ともなれば、戸と柱の隙間からの冷たい風が気になる。直さなくてはと思いつつも、とうとう腰を上げなくてはならなくなった。そんな冬隣りの暮らしの一瞬を句にした。昨今は住宅会社の社員が家を建て、アルミサッシュという優れ物がある。戸当たりって何?と言われそうだ。

PCで文科省中学国語指導要領を基にした国語の教科書を見付けた。今は「助詞」の項を拾い読みしている。私には結構難しい。



国立青少年教育振興機構より

伝道者の書12:1

あなたの若い日に、あなたの創造者を覚えよ。

わざわいの日が来ないうちに、また「何の喜びもない」と言う年月が近づく前に。

皆様クリスマスおめでとうございます。私は教会で送るクリスマスは今年で3年目です。本当に時間の速さを感じます。実は教育実習のことを書こうと思ったんですが、もう色々話したので今回は最近で最も励まされ、そして学んだことを話して行きたいと思います。

ご存知の方はご存知かと思うのですが、先日私は熊本の教会に行きまして。教育実習お疲れ様旅行として親友のクリスチャンの後輩に会ってきました。そして、その子の教会で礼拝を守りました。そこで僕はクリスチャンの女子高生達に出会いました。あまり中高生のクリスチャンに出会ったことがなかったのどんな感じなのかなと思っていました。そしたら、とても元気良くてびっくりしました。それ以上に信仰に熱い人達ばかりでした。僕は中高生の信仰の底力を全然わかってなかったと思いました。私はKGKで大学生の信仰の凄さ、信仰の熱の強さをものにしていましたが中高生はあまり関わる時はありませんでした。中高生との関わりは新鮮でした。

また、話を聞いていて感じたのが、どんなに問題抱えていても、どんなに試練の時でも彼女らは神様の方向を向いていました。本当に素敵だなと思いました。僕も見ている励まされました。この出来事を通して、中高生の信仰を持つことはとても素晴らしいなと思いました。中高生の時代はどうしても神様から離れてしまいがちです。しかし、その子達は神様から離れずにずっと信仰に立っていました。中高生の信仰は尊くすごいなと思いました。「私も頑張ろう！」と思って若松に帰ってきました。

そ私は今2024年3月に行われるKGK(キリスト者学生会)九州地区主催の中高生キャンプ「たまご3」の準備委員会準備委員長をしています。僕は熊本に行く前「中高生に仕えるとは何か？」という問いを持っていました。

正直言われた時漠然とし過ぎてわかりませんでした。でも実際中高生に触れる機会が与えられて、「中高生に仕えるというのはその子達の信仰も守りつつも成長させることなんだらうな」と少し思うようになりました。これが決して問いの答えとは限らないですし、まだ別の答えがあると思います。しかし、これから話し合いを重ねて行く上でこのことは大切にしていきたいなと思いました。

今回の聖書箇所伝道者の書12章1節です。若い日は2つあって「今日」と「本当に若い日」です。この出来事を通して神様に繋がるのは本当に若い日が大切だということを感じました。また、私も18歳の時にイエス様を知りました。これは本当に感謝だなと思っています。今度は私が若い人に仕える番です。どんどん中高生や大学生に仕えて行きたいです。ぜひたまごキャンプのために祈って欲しいです。



たまご2テーマ
this is LOVE

私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があります。
第1ヨハネ 4:10

日程 2021年 3月29(木)~31(土) 講師 KGK関西地区主事 池淵 亮介

今後、この状況が多くなっていく中私たちにはわかりませんが、すべてのことを主としてくださる神様に信頼して準備を進めていきます。ぜひ、覚えてお祈りください。

たまごキャンプ2リトライのチラシです☆

2022年度 教会の歩みと予定

- 4月 イースター礼拝(17日)
- 5月 九州教区総会(3日) 創立記念日礼拝(8日)
- 6月 ペンテコステ礼拝(5日)
- 7月 地区交換講壇(中止)
- 8月 平和聖日(7日)
- 10月 若松キリスト教連合野外礼拝(23日)
- 11月 逝去者記念礼拝(6日)
- 12月 アドヴェント、クリスマス諸行事
- 1月 新年礼拝(1日) 地区信徒研修会
- 2月 信教の自由を守る平和集会
- 3月 地区総会



2022年4月17日、イースター礼拝後のミニコンサート



2022年10月23日、若松キリスト教連合野外礼拝

毎月の集会

- ・ 聖書研究祈祷会 (休会中)
- ・ あも〜るの会 (第3日曜日礼拝後)
- ・ 生と死を考える会 (休会中)
- ・ 若松キリスト教連合祈祷会 (毎月)

編集後記

コロナは、第8波に入り、収束の兆しが見えません。佐藤さんは、外出が許可されず、この3年間、礼拝に来ることが出来ません。ストレスは、いかばかりかと思います。これまでの生活や仕事が制限されて、困難な状況にある方々も多いと思います。一日も早く、コロナが収束することを願います。

一方、世界を見ますと、ウクライナでは、戦争が続いていますし、あちらこちらで紛争が絶えません。日本も浮足立ち、話し合いの努力を置き去りにして、敵基地攻撃能力を持つようとしています。

追伸: 10月より聖日礼拝のライブ配信を始めました。若松教会のホームページに案内があります。

このような状況の中でも、クリスマスキャンドルの光は暖かく、ほっとします。希望の光を見ているようです。



筒井隆夫

フォトギャラリー

